



三浦 暁子（みうら あきこ）。1956年・静岡県生まれ。上智大学在学中に結婚、専業主婦を10年ほどした後、突如、文筆活動を開始。現在は神戸市在住。エッセイストとして活動中。著書には『ボルネオの白きラジャ』（NTT出版）、『梶本隆夫物語』（燃焼社、共著）に『家族はわかり合えないから面白い』（三笠書房）など。

誕生日に思う

◆以下に紹介する2人の文章は、「本照寺だより77号」でも紹介しました株式会社クマヒラが発行する「拔萃のつづり」から転載したものです。「拔萃のつづり」とは、様々な新聞、雑誌、書籍などから珠玉のエッセー、コラムを抜萃し、一冊の本としてまとめ、1年に1冊発行。昨年で77号ですから、今年で78年にも亘り続いているのです（無料配付）。どうぞ、クマヒラ創業者である熊平源蔵の言葉「宗教に現世の浄土化思想の必要は私の持論」との意をお汲みとり頂き、読んでくださいますよう。

■40歳を過ぎたころから、私は誕生日を喜ばなくなりました。体や心の衰えを突きつけられているようで、嬉しいとは思えなかったのだ。ああ、またひとつ、年を取ってしまったと、ため息をつく。それが誕生日の朝の私の姿だった。けれども、それは身勝手な贅沢な感想だ。誕生日はこの世の幸福として受けとめるべきなのに。最近になって、私はそう思うようになった。

■きっかけはある男性の言葉だ。彼はアナウンサーだった。一緒にラジオの番組をした仕事仲間であり、飲み友達であり、夫の親友でもあった。快活で、几帳面で、仕事熱心な彼に異変が起きたのは、48歳のとき。癌が発見されたのだ。それも悪性の。

若かったこともあり、進行は驚くほど早く、気づいたときには、既に手遅れの状態だった。苦しい検査の末に得た結論は、「余命3か月、手のほどしようがない」であった。

■彼はその残酷な診断を穏やかに受け止め、治療に邁進した。その甲斐あつてか、発病から3か月がたつても、彼は仕事を続けていた。

49歳の誕生日には、仲間が居酒屋に集まって誕生会をしたのだが、主賓である彼は元気がつらつと、とても末期癌に冒されているようには見えなかった。

末期癌の中「僕は50歳にはどうしてもなりたい」

「暁子さん、ぼくは50歳になれたらいい。あと1年、生きていられるだろうか」息をのんで立ち止まった私に彼は重ねてこう言った。アナウンサーらしいよく響く声だった。

「ぼくは50歳になりたい。51歳にはなれなくてもいい。でも、50歳にはどうしてもなりたい」

「なぜ50歳になりたいの？」と、尋ねた。彼はこう答えた。「ぼくが50歳になった1か月後に、娘が成人式なんだよ。振り袖を着て出て行くのを女房と2人で見送りたい。ベッドの上からでもいいから、ただ、行っておいでと言いたいんだ」

彼は笑っていた。そして、同時に泣いていた。笑って泣いている彼の横で、私はどうしてよいかわからずに、傍らにあった時計をにらみつけた。

た。時がうらめしかった。なぜあのとき、「なれるわよ、きつと50歳になれるわよ」と、言わなかったのだろう。嘘でもいいから、なぜそう言わなかったのだろう。

50歳になりたい。そんなささやかな望みもかなえられないまま死んでいかねばならない人がいる。そのことを私はどう理解し、解決したらいいのだろう。せめて彼にはこう伝えたい。笑って泣きながらこう言いたい。

■そして、結局、50歳になる2か月前に、彼は逝った。お嬢さんに「成人式を見たかった」と伝えることもせずに、亡くなった。

50歳になりたい。そんなささやかな望みもかなえられないまま死んでいかねばならない人がいる。そのことを私はどう理解し、解決したらいいのだろう。せめて彼にはこう伝えたい。笑って泣きながらこう言いたい。

幸せ 豊かき



千住 真理子（せんじゅ まりこ）。1962年4月3日生。慶應義塾大学卒業。2歳半よりヴァイオリンを始める。全日本学生音楽コンクール小学生の部全国1位。NHK交響楽団と共演し12歳でデビュー。日本音楽コンクールに最年少15歳で優勝。レウカディア賞受賞。パガニーニ国際コンクールに最年少で入賞。（あけぼの、H19年8月号より）

■大学に通っていたころである。ある友人にこんなことを言われた。「千住のやってる音楽って、非生産的だよな。世の中が一大危機に陥ったとき、一番最初に

カッとなるものだよな。もつと世のため人のため、生産性のある仕事こそ我々のやるべき仕事じゃないかな」

■「いや、本当にそれだけか？」と、それから数年後、再びヴァイオリンを手にする決心をした私が向かったのは、戦争などの犠牲として厳しい経済状態に陥った「地」だった。

■幼い子どもたちは私の演奏する足元まで来て膝を抱え座り込んで聴いている。老若男女が身じろぎもせず、きらきら輝く瞳を、突き刺さるほど真っ直ぐに私に向けている……演奏し終わると、青年たちがかたくなつたパンのようなものをどつさり運んできて言った。

「苦しみから解放された。人を憎む気持ちが消えた、と皆言ってる。子どもたちは久しぶりにかわいい笑顔を見せてくれた。私たちにはまだ希望があること

強い疑念が湧いてきた。ちょうどそのころ、私は自分の演奏家としての道にも行き詰まっていたところだ。人が音楽で救われることがあるのか、純粹に感動するものなのかさえ、わからなくなってしまうていた。それから私はヴァイオリンを置いた。ヴァイオリンリストとしての自信をすっかり失っていたのだ。

■予想をはるかに越えた荒れ地、食料も、わずかな水も仲間同士で分け合ひながらの生活、いつ何が起ころうか知れない不安絶望に沈む瞳、……これでは音楽どころじゃないだろう……？不安を抱きながら、集会場の

「心配しない。私たちが決して貧しくない。お金はないけれど心は豊かだ。あなたの音楽で私たちは満たされた。お金をたくさん持っている大きな国の人々より、ずっと私たちは豊かだ」そう言う周りの人々と共に、大きな身振りを交えながら穏やかに笑った……

人の幸せとは何だろう。豊かなこととはどういうことだろう。そのときの情景と彼らの澄んだ瞳が、私は今も忘れられない。

編集後記

◆人に自信与える「一言」の重みを無職 水元敬一 65（東京都立川市）
◆私は妻を3年前に亡くしましたが、生前、妻の「一言」でどれほど励まされ、慰められたことか、はかり知れません。出勤の時は行ってらっしゃい。気をつけて、帰宅時にはお帰りなさい。お疲れさまと声をかけてくれました。給料日にはありがたう。苦労さまと言い、私の作るカレーをお父さんの味は天下一品。何か隠し味があるのじゃないかと持ち上げ、買ってきたお土産をうれいわと心から喜んでくれました。私がだらしない生活をしていると、びっくりしてください。家族があなたの双肩にかかっていますと叱咤激励してくれ、私にやる気をおこさせてくれました。ほんの一言で人をやる気にさせ、自信を持たせることができるのです。（再登場）